

### 三ノ九、如教笠置寺毎日仏供勸進状

出典 一、弥勒如来感應抄（東大寺蔵）を中心として

二、解脱上人御草等（花園大学蔵）にて検証した。

解説 沙門信長の毎月仏供にならって如教が毎日仏供の勸進をおこない、笠置寺常住の僧により八名経一卷を誦して弥勒の宝号百遍を念じ、弥勒の兜率天に上生し、弥勒のもとで修行し、弥勒下生の際にともに下生せんことを祈るもので、弥勒石像のある笠置寺にふさわしい法会であった。

原文

仏子如教勸進

笠置寺毎日（二「毎日」なし）仏供事

竊以諸仏如来出世成道十方三世利物無辺然而他界無縁不聞其名過去空過不受其化嗚呼悲哉悠悠生死淪没無依方今大聖慈尊者忍土之化主當來之導師也機感是厚付属有由無量劫中難得而得當知法爾之繫属往劫之因縁也但行願不具者引接甚難福智不滿者出離尤遠須結勝縁於此時方期得脱<sup>\*</sup>於將來仍仏子等十二輩聊為勸進之張本普訪親疎之知識方就弥勒靈異之勝地欲展每日不退之供養事是雖微以久而不絶為望功是雖賤以淨而不汚為貴彼施一搏於衆生猶為龍華<sup>\*</sup>値遇之勝縁今捧淨供於慈尊豈非知足上生之良因乎加之每供養之次令常住之侶誦八名妙典一卷唱弥勒宝号百返以報<sup>\*</sup>施主之恩弥增大士之行抑日別之供限以一升蓋為令功易也其度数之多少年限之長短<sup>\*</sup>眞任人樂敢不進止具録姓名永伝<sup>\*</sup>寺家勸進及結縁適有其闕者更補他人永不墜願以此功德普廻施法界四恩三有平等濟度又同心之人合力之輩同上生知足共値遇慈尊下生之日我又下生在世八万歳之間如影隨從未來廿六恒之仏盡沙歴仕敢不期积梵輪王有漏之報只偏資菩提涅槃無相之因伏乞善男善女種殖福因矣敬白

文治元年十二月二十一日（二は「月日空白」）

読み下し文

仏子如教勸進

笠置寺毎日仏供の事

竊に以て諸仏如来、出世成道し、十方三世の利物（衆生を救うこと）無辺なり。然れども他界は無縁にして其の名を聞かず。過去空しく過ぎて其の化を受けず。嗚呼悲しい哉。悠々として生死、淪没（衰える）にも無依（執着しないこと）なり。

方今（現在）大聖慈尊（弥勒如来）は忍土（この世）の化主にして当来（未来）の導師也。機感（仏が衆生の有様に対応すること）是れ厚く、付属（師が弟子に仏法の奥義を伝授してそれを後世に伝えるよう託すること）に由（いわれ）有り（弥勒菩薩は五六億七千万年後この世に現れて衆生を濟度するとされる）。無量劫（永遠に近い時間）中、得難くして得る。当に法爾の繫属を知り、往劫の因縁を知る也。但し行願（ことをなそうとする願い）具せずば引接（仏が慈悲心で撰取の手で衆生を導くこと）甚だ難く、福智（功德と智慧）満たずば出離（悟りの境地に至ること）尤も遠し。須べからく勝縁を此の時に結び、方に解脱を将来に得る（二による）べし。

仍つて仏子等十二輩、聊か勸進の張本と為り、普く親疎の知識（友人）を訪ね、方に弥勒靈異の勝地に就き、毎日不退（勤行を不断に怠りなく続けること）の供養を展べんと欲す。

事、是れ微なりと雖も、久しくして絶えざるを以つて望みと為し、功、是れ賤しと雖も、淨にして汚れざるを以つて貴しと為す。彼の一搏（か）を衆生に施し、猶龍花值遇（弥勒菩薩が龍華樹のもとで成仏し、三会において説法するにあずかること）の勝縁と為す。

今、淨供を慈尊に捧ぐは、豈知足上生（弥勒下生を待たずして弥勒の現在する兜卒天に生まれかわること）の良因に非ずや。

之に加うるに供養毎の次ぎにて、常住の侶をして八名の妙典一卷を誦せしめ、弥勒の宝号百遍（二による）を唱へ、以つて施主の恩に報い、弥、大士（道心堅固な僧）の行を増す。

抑も、日別の供、以つて一升に限る。蓋し功を易くせしむるたやす為也。其の度数の多少、年限の長短、宜しく人の樂（好む）に任せ、敢えて進止（行動の方向付けを決定し、指示すること）せず。具に姓名を録し、永く寺家に伝へ、勸進及び結縁に適う。其の闕有らば、更に他人を補し、永く失墜させず。

願はくば此の功德を以つて、普く法界に廻施（回向）し、四恩（全ての人間が受ける四種の恩）を三有（三界の衆生）に平等に濟度（衆生を悟りの境地に救い渡すこと）されんことを。又、同心の人、合力の輩、同じく知足（兜卒天、弥勒菩薩が在住）に上生、共に慈尊に値遇し、下生の日、我れも又下生し、在世八万歳の間、影の如くに随い、未来廿六恒の仏、盡沙の歴仕に従い、敢えて釈梵輪王有漏（煩惱があること）の報を期さずして、只だ偏に菩提涅槃無相の因に資さんことを。伏して乞う、善男善女の種、福因を殖さんことを。

敬白

文治元年（一一八五年）十二月二十一日